

野外スポーツ体験の深まりによる帰属意識の獲得過程に関する研究

黒田 大智 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：野外スポーツ体験の深まり，帰属意識，質的研究

1. 序論

高木(2006)は、「組織に属すること，良好な人間関係の一員となることは，人間の基本的な欲求である。現代社会で，いかなる組織にも所属せず，一切の人間関係を絶って生活するという状況は，健全な生活という点からは通常考えにくい。」と述べている。この帰属意識を向上させる活動の一つとして，冒険教育プログラムをはじめとした野外体験に着目した。竹内(2007)は，「冒険教育とは，活動の難易度が上がると共に，一定のストレスとリスクが参加者に向けられる。これらの困難を乗り越えることで，『自己への気付き』，『他者への気付き』，『自然への気付き』を深め，それらの感情を日常生活に適応させる教育である」と述べている。つまり野外スポーツ体験のような冒険教育の深まりによって帰属意識の獲得過程は異なってくるのではないだろうか。野外スポーツ体験の深まりによる帰属意識の獲得過程を明らかにすることは，その後の大学生活をより良く送るための資料として役立つと考える。

本研究は，野外を専門に学ぶ大学生の帰属意識について，その獲得過程を野外スポーツ体験の深まりから明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】B 大学野外スポーツコースに所属する，2回生・3回生・4回生から，男女1名ずつの計6名を抽出し調査対象とした。

【調査方法】インタビュー調査を実施した。1人当たり20～40分程度(1対1形式)の半構造化インタビューであり，得られた発話データはグランデッドセオリーアプローチに基づき 1. 切片化，2. コード名をつける，3. コード名の比較と共通グループを生成，を行った。これらの手続きから「各 Inf. の帰属意識獲得モデル」を導き出した後，カテゴリーの比較，修正，検証，精緻化を行い，「野外スポーツ体験の深まりと帰属意識に関する概念図」を作成した。以下，本文中の「」は，発話データから得られたコードであり，また【】は，カテゴリーである。

3. 結果及び考察

インタビューの結果，6人の Inf. に共通して見られたのは，【満足感の獲得】・【達成感の獲得】・【新たな意識・変化】である。これら3つの要因が，帰属意識の獲得につながっていた。(図1)

導入の過程では，「自分への課題」に関する語りが多くみられた。自分の課題を発見することができたことや，所属前に持っていた【イメージの変化】が起きたことなどから，【新たな意識・変化】や【達成感の獲得】，【満足感の獲得】を感じ，帰属意識の獲得につながった。展開の過程では，「自分への期待」や目標に対する語りが多くみられた。自分への新たな期待や目標を見つけたことや，今までは

経験できなかった「専門的な体験」を広く，そして深く経験したことで，「新たな楽しみ」の発見や，「指導する喜び」を得ることができた。このことから，【達成感の獲得】や【満足感の獲得】，【新たな意識・変化】を感じ，帰属意識の獲得につながった。応用の過程では，将来に向けた【自己成長への期待】についての語りが多くみられた。より「高い目標意識」を持てたことや，自分の【将来性】を見つけたことから，【満足感の獲得】や【達成感の獲得】，【新たな意識・変化】を感じ，帰属意識の獲得につながった。また，帰属意識を獲得することにより，【コースへの想いと期待】が現れた。コースへの想いに関しては，「コースの繋がりが弱い」や，「活動への取り組み方」など，【野外特有の環境に対する想いについての語り】がみられた。コースへの期待に関しては，「高い意識を持った集団」や，「先輩とのつながり」など，野外特有の人の繋がりに関する期待についての語りがみられた。

4. まとめ

帰属意識を獲得する過程には，【満足感の獲得】や【達成感の獲得】，【新たな意識・変化】が含まれることが明らかとなった。野外スポーツ体験が深まる中で，自らそこに経験や知識を肉付けしていく。そして，段階ごとに差はあるが帰属意識の獲得に必要な要素を得る。また，野外スポーツ体験の深まりが増すことで，帰属意識の獲得過程が充実し，より具体的な今後の展望や期待が現れることが分かった。

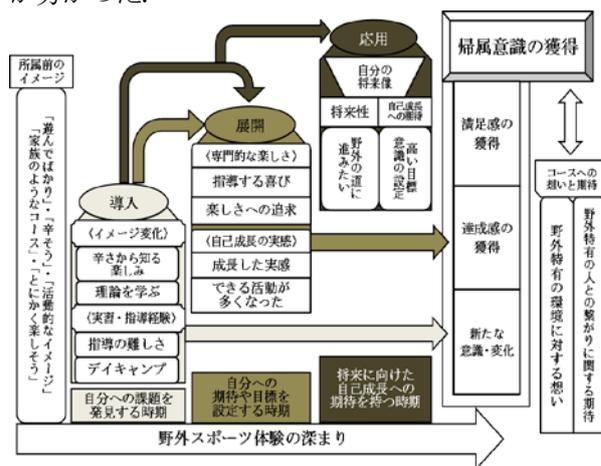


図1 野外スポーツ体験の深まりと帰属意識に関する概念図

高木浩人(2006): 大学生の組織帰属意識と充実感の関係，愛知学院大学心身科学部紀要，第2号増刊号，pp. 61-66
竹内啓(2007): 冒険教育プログラムに参加した大学生の達成動機の変容 - 実習参加学生の語りから - ，びわこ成蹊スポーツ大学卒業論文